



●調査結果より明らかになったこと

【大学の変化】

23～34歳と40～55歳の世代別に調査結果を比較すると、大学の教員・職員の学生支援は手厚くなり、学生の設備、制度の利用度も向上しており、ソフト、ハードともに**学びの環境整備が進められている**。また、**内容・形式ともに多様な教育プログラムの提供機会が増加**しており、教育面でも大学の変化が明らかとなった。これらの変化は、大学教育関係者が学生の成長のために尽力してきた結果であり、1990年代以降の大学教育改革の成果といえる。

【学生の変化】

23～34歳と40～55歳の世代別に調査結果を比較すると、目的意識を持った大学進学により、**学習意欲を持って入学する学生が増加し、大学での学習態度が真面目になっている**。一方で、大学に対する期待の高まりの反動だろうか、入学後の生活や大学での学習への戸惑いを感じる学生の割合は増え、大学不適應の問題は深刻化している。

また、卒業生が社会経験を積むほどに、主体的学びの価値を痛感している一方で、在學生はその価値に気付かずにいることもわかった。学生のうちに、大学での学びの価値を知り、恵まれた学びの環境から最大限の学習成果を得ようとする姿勢を持たせることが重要である。

●参考 大学進学率の推移(1980～2010年)

年(西暦)	4年制大学・短期大学への進学率
1980	37.4%
1985	37.6%
1990	36.3%
1995	45.2%
2000	49.1%
2005	51.5%
2010	56.8%

本調査対象者の大学入学年に該当する期間の大学進学率の推移。30年間で37.4%から56.8%まで増加し、大学のユニバーサル化が進んだ。

※出典 文部科学省「学校基本調査」より



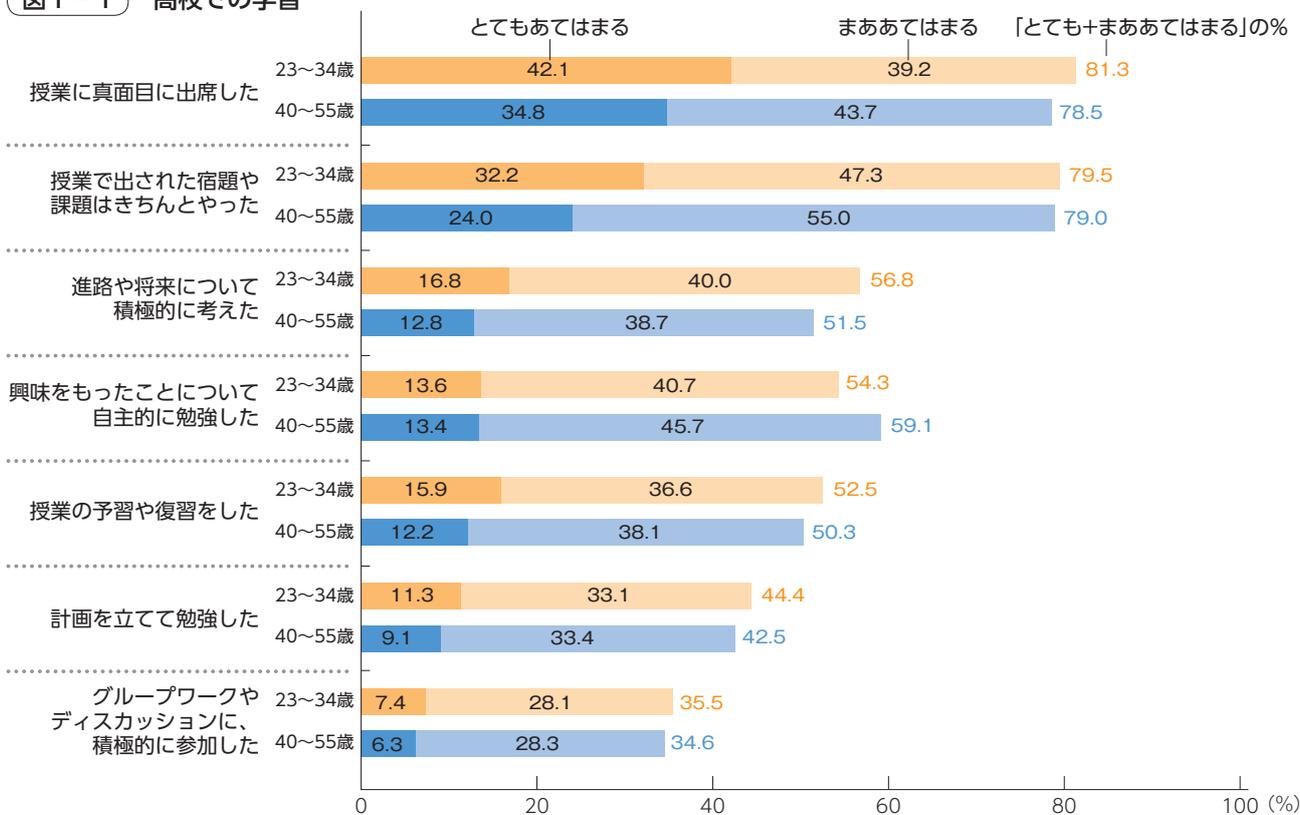
高校時代の学習態度はやや真面目に。一般入試が減少し、推薦・AOでの入学者が増加。

高校時代の授業や勉強の様子を、23～34歳と40～55歳の世代間比較でみると、「進路や将来について積極的に考えた」に「とても+まああてはまる」と回答した割合が、5.3ポイント差(23～34歳 56.8%、40～55歳 51.5%)であるが、その他の項目に差はみられなかった。ただし、「とてもあてはまる」と回答した割合をみると、「授業に真面目に出席した」が7.3ポイント差(23～34歳 42.1%、40～55歳 34.8%)、「授業で出された宿題や課題はきちんとやった」が8.2ポイント差(23～34歳 32.2%、40～55歳 24.0%)で、やや真面目化している。入試方式をみると、一般入試が減少し、指定校推薦やAO入試が増加している。日常の学習状況や個性や適性など、多面的に評価する入試が増えているようだ。



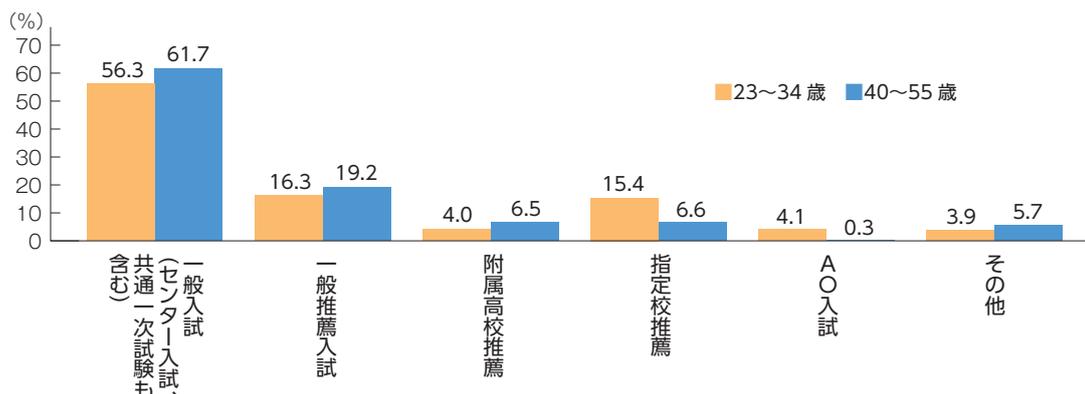
高校時代の授業や勉強の様子にあてはまるものを、それぞれひとつお選びください。

図1-1 高校での学習



大学受験の際の入試方式にあてはまるものをひとつお選びください。

図1-2 進学した大学の入試方式



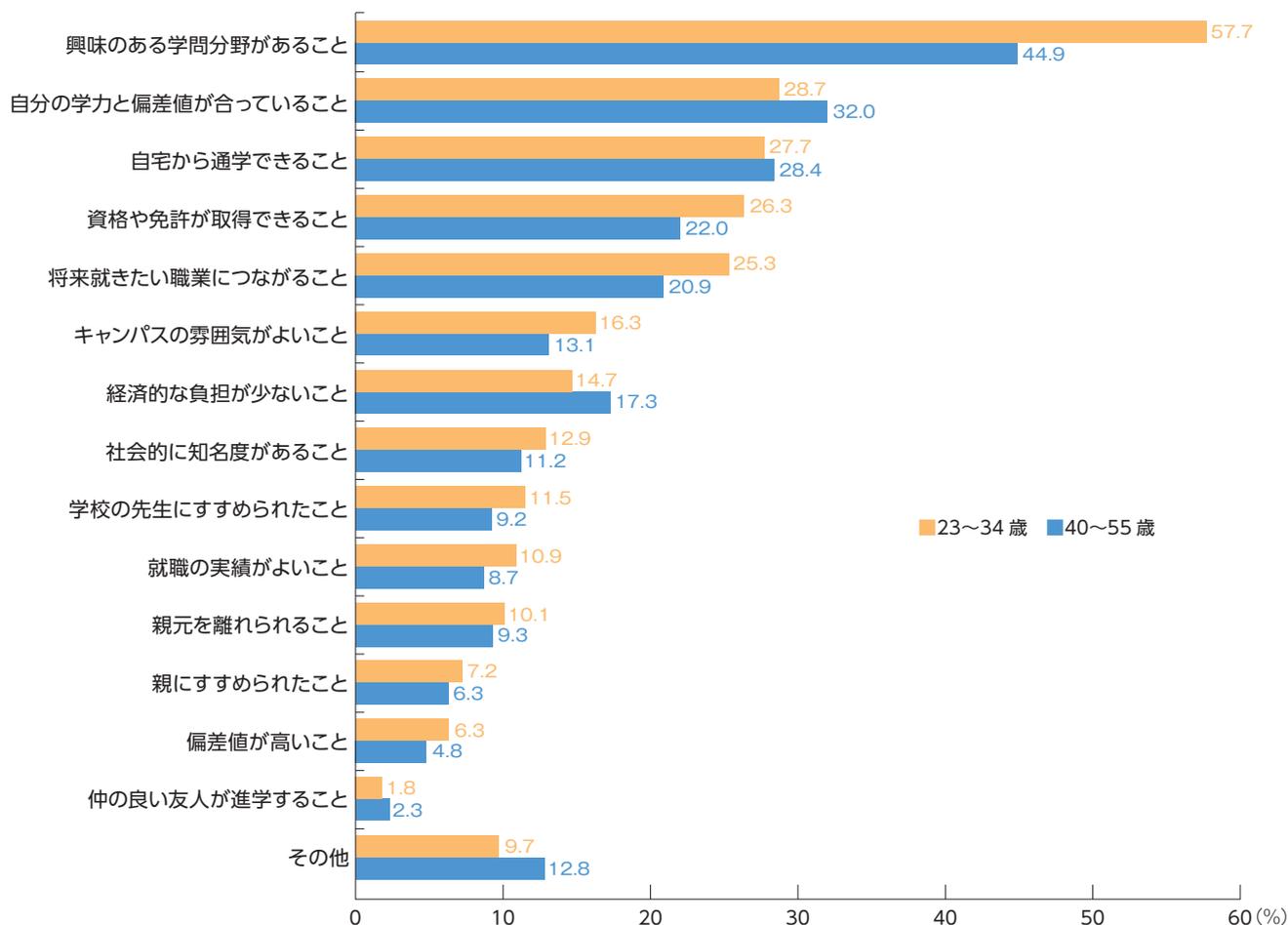
✔ 世代にかかわらず、もっとも多い入学理由は「興味のある学問分野があること」。

大学入学を決めた理由をみると、いずれの世代においても「興味のある学問分野があること」がもっとも多い。さらに23～34歳と40～55歳の世代間比較でみると、興味のある学問分野に加えて、「資格や免許が取得できること」、「将来就きたい職業につながることを選択した割合もやや増加している。学問の内容や資格、将来の職業とのつながりを重視する傾向が強まっているようだ。入学時の満足度をみると、「とても満足して入学した」と回答した割合がやや増加している。



大学に入学を決めた理由にあてはまるものをすべてお選びください。

図2-1 大学入学理由

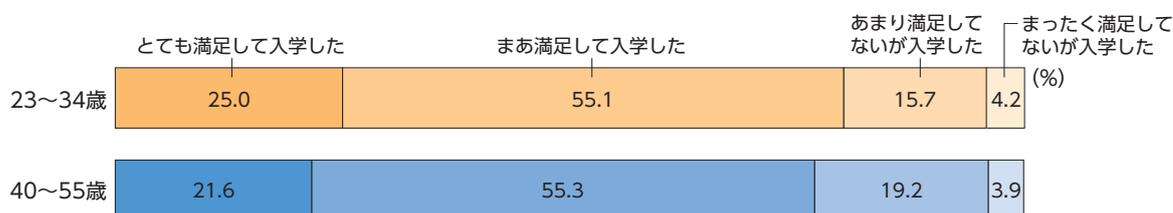


※複数回答。



大学入学時の気持ちにあてはまるものをお選びください。

図2-2 大学入学時の満足度



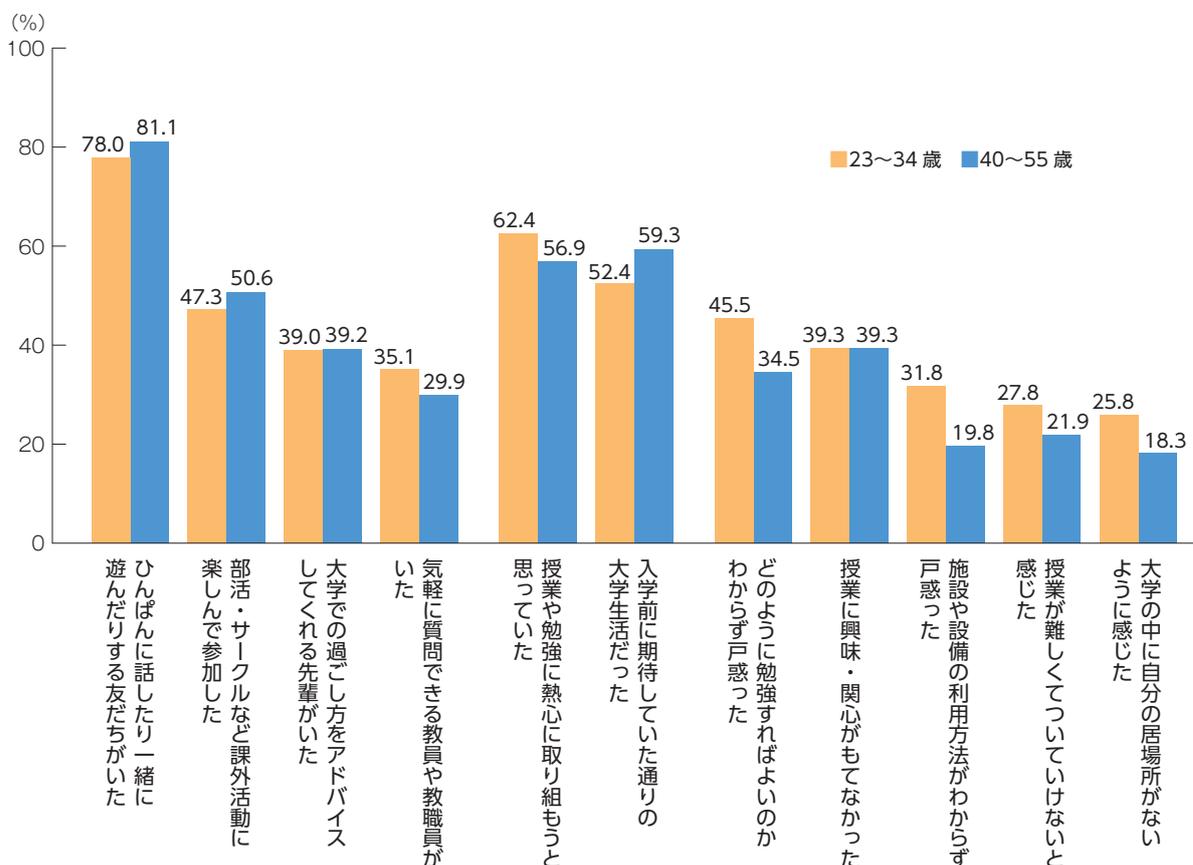
大学への授業・勉強への期待がふくらむ一方、入学後に難しさや戸惑いを感じる割合も増加。

大学入学時の状況を、23～34歳と40～55歳の世代間比較でみると、友人や先輩との付き合い、部活・サークルへの参加の実態には変化がないものの「気軽に質問できる教員や教職員がいた」に「とても+まああてはまる」と回答した割合が増加していた。入学直後の段階から、教員や教職員が学生と関わる機会は増えているようだ。次に、「授業や勉強に熱心に取り組もうと思っていた」という前向きな姿勢の増加と同時に「授業が難しくついていけないと感じた」、「どのように勉強すればよいかわからず戸惑った」、「大学の中に自分の居場所がないように感じた」など不適応を示す項目も増加している。期待して入学した半面、困難や戸惑いを感じる学生が増えているようだ。入学時の行動タイプについては、「自分から積極的にやりたいことを探しやるほうだった」との回答は約3～4割で、世代間比較でみるとやや減少傾向にあった。



大学に入学してから夏休み頃までの状況を思い出し、あてはまるものをそれぞれひとつお選びください。

図3-1 大学入学時の状況



※「とても+まああてはまる」の%。



大学入学時のあなたにあてはまるものを直感的にお選びください。

図3-2 大学入学時の行動タイプ



※「あてはまらない、わからない」と回答した者は、分析から除外する。

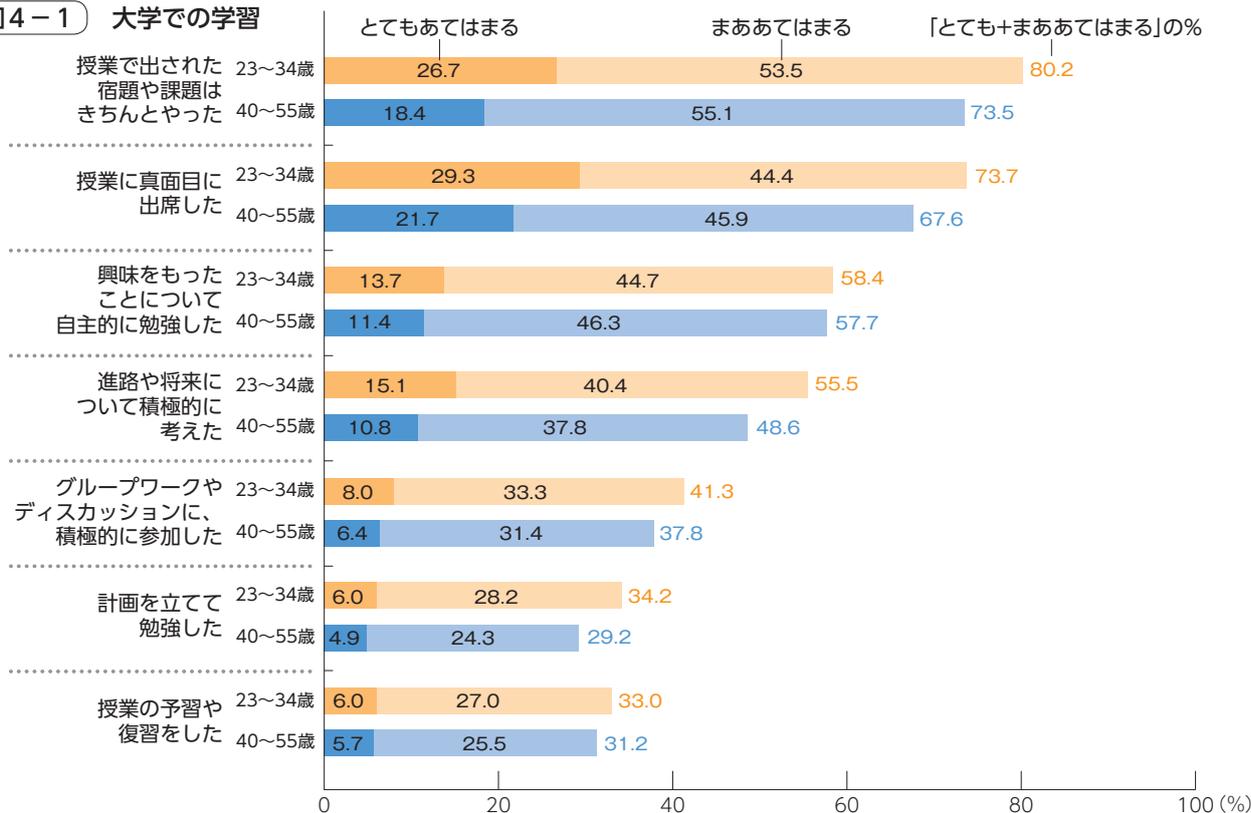
大学での学習態度は真面目化。正課内外ともに大学時代の活動経験が豊富に。

大学時代の授業や勉強の様子を、23～34歳と40～55歳の世代間比較でみると、「授業で出された宿題や課題はきちんとやった」、「授業に真面目に出席した」、「進路や将来について積極的に考えた」に「とてもあてはまる」と回答した割合が増加している。一方で、「興味をもったことについて自主的に勉強した」、「グループワークやディスカッションに、積極的に参加した」の回答に、大きな差はみられなかった。大学時代に経験したものをみると、サークルや部活動、アルバイトは変化がないが、それ以外の活動が増加しており、大学時代の経験は豊富になっている。



大学時代の授業や勉強の様子にあてはまるものを、それぞれひとつお選びください。

図4-1 大学での学習

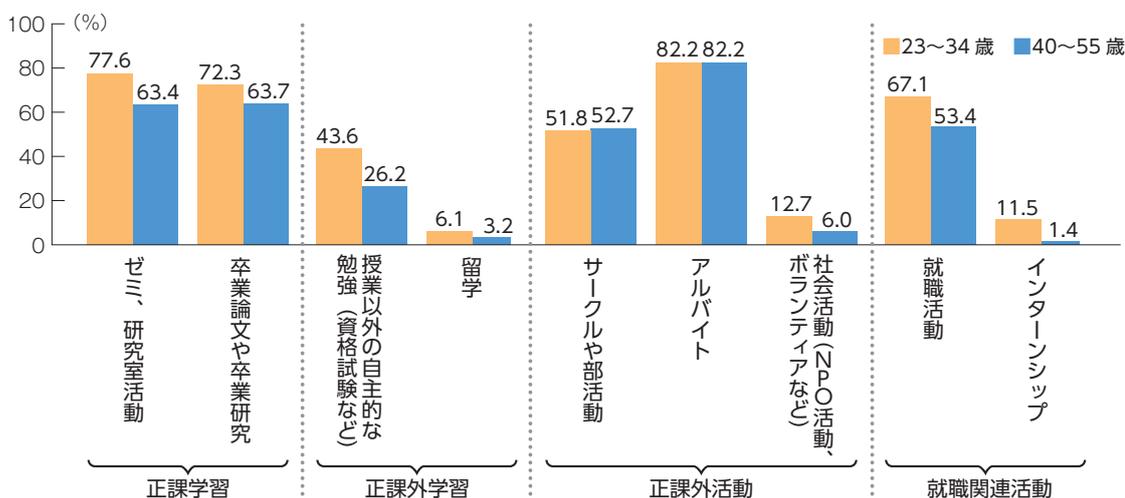


※「とても+まああてはまる」の%。



大学時代に経験したものをすべてお選びください。

図4-2 大学時代の経験



※複数回答。

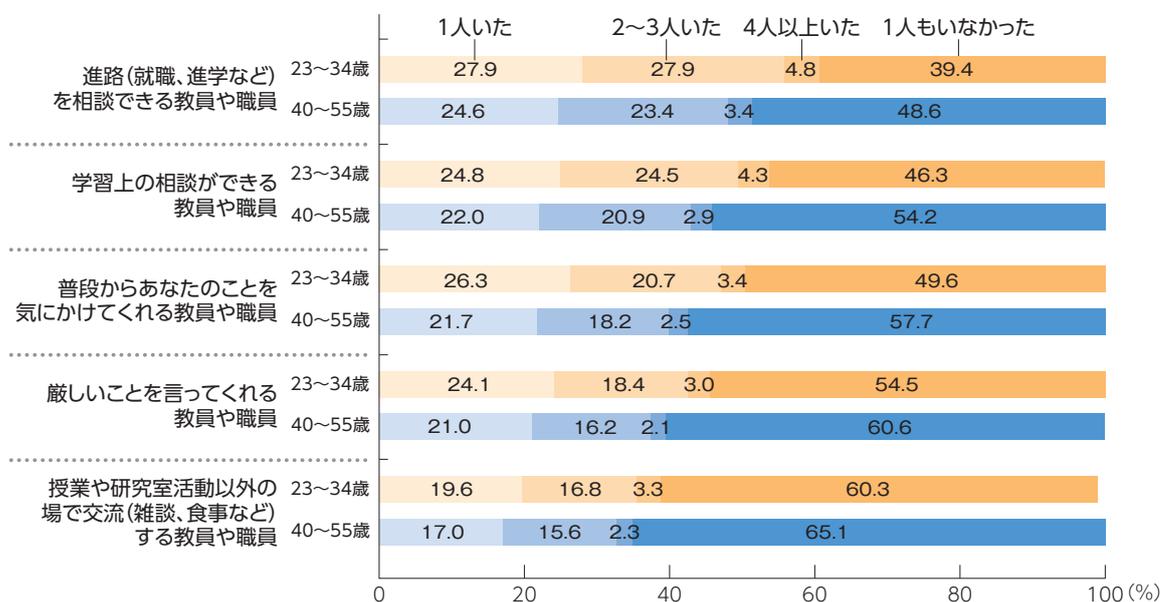
✓ 教員・職員と学生の関わりは増加。設備、制度など学びの環境整備が進む。

大学時代の教員・職員とのつながりを、23～34歳と40～55歳の世代間比較でみると、いずれの項目においても「1人もいなかった」と回答した割合が減少しており、教員・職員と学生との関わりは増加している。とはいえ、依然として、23～34歳の層でも、相談できたり気にかけてくれる教員・職員が「1人もいなかった」と回答した者が4～5割存在しており、まだまだ改善の余地はありそうだ。

学内の設備や制度の利用状況をみると、ほとんどの設備や制度について利用率が増加しており、大学が学びの環境整備をすすめてきた結果といえる。

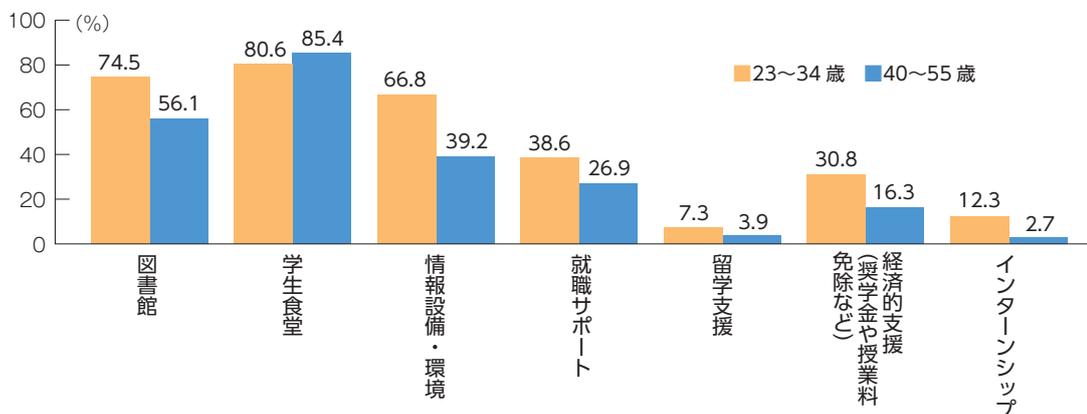
Q 大学時代、次にあげたような教員や職員は合計何人いましたか。あてはまるものを、それぞれひとつお選びください。

図5-1 教職員とのつながり



Q 大学内の設備や制度の利用状況に、あてはまるものをそれぞれひとつお選びください。

図5-2 設備・制度の利用



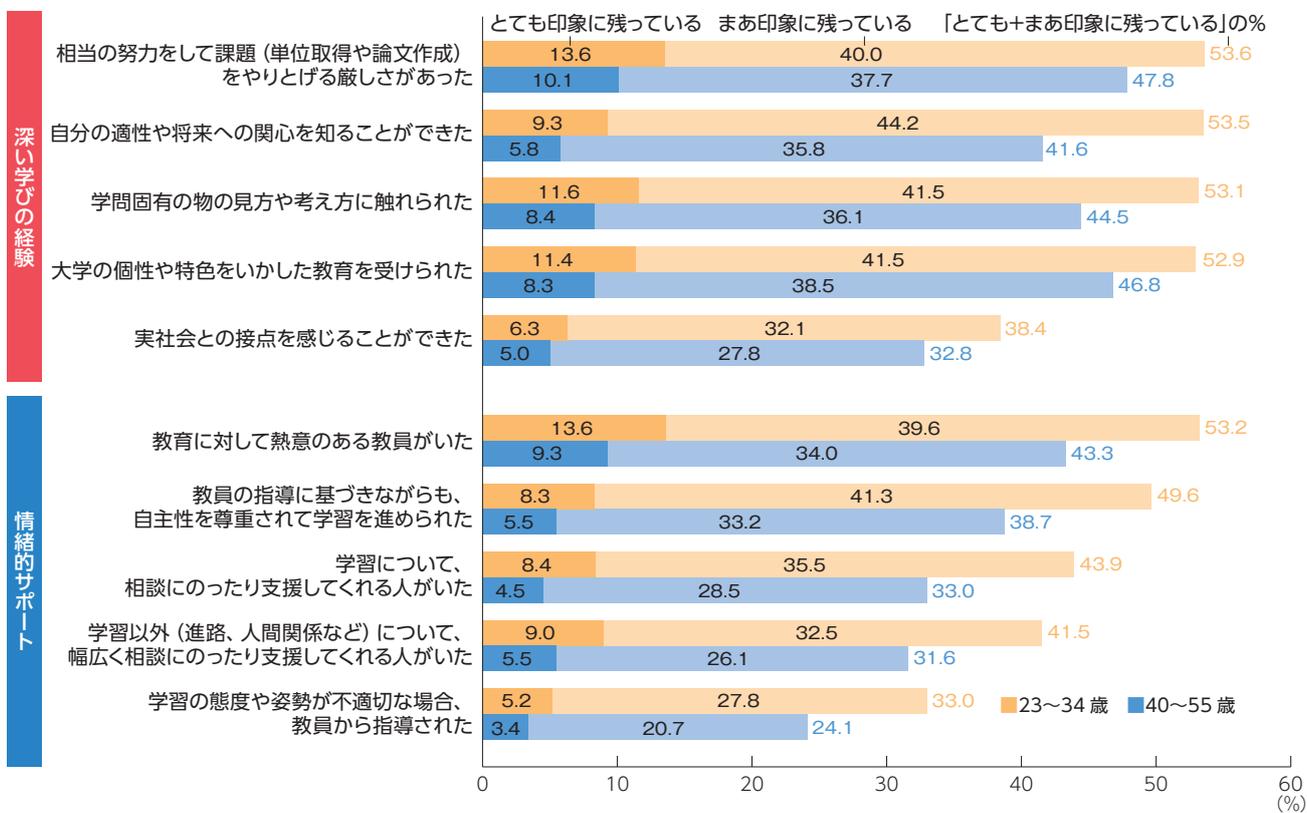
※「よく+ときどき利用した」の%。

大学教育に対する印象は、「深い学びの経験」、「情緒的サポート」とともに強まる傾向。

大学時代に受けた教育の印象を、「深い学びの経験」を示す5項目と「情緒的サポート」を示す5項目にわけてたずねた結果を、23～34歳と40～55歳の世代間比較でみた。いずれの項目も「とても+まあ印象に残っている」と回答した割合は増加している。世代間比較で差がもっとも大きかったのは、「深い学びの経験」の中では「自分の適性や将来への関心を知ることができた」が、11.9ポイント差(23～34歳 53.5%、40～55歳 41.6%)で、23～34歳の層が大学教育に資格や将来の職業とのつながりを求める傾向を強めていること(P8大学入学理由 参照)とも合致する。「情緒的サポート」は、いずれの項目も約10ポイント程度増加しており、大学教員による支援の充実がうかがえる。

Q 大学教育(授業、ゼミ、研究室、先生からの指導など)を通して、次のような経験はどれくらい現在も印象に残っていますか。あてはまるものを、それぞれひとつお選びください。

図6-1 大学教育の経験(印象)



卒業生が語る印象に残る大学教育とは？



授業でお酒を作ったのは印象に残っています。実際やってみないとわからないことがあった。クラス40人全員が同じことをやっているのに、出来上がったお酒の味はそれぞれ違っていた。最後にみんなで飲んで、順位を付けたのはいい思い出です。



先生より「テーマは何でもよく、興味のあることを研究して論文を書きなさい」と言われた。細かい相談に対しても、丁寧な指導をしてくれた。論文のテーマは先生の専門ではないはずなのに、いろいろ調べて知識を溜めたはずの僕より知識を持っていて、素直にすごいなと思った。

※大学での学びと成長に関するヒアリング調査より。



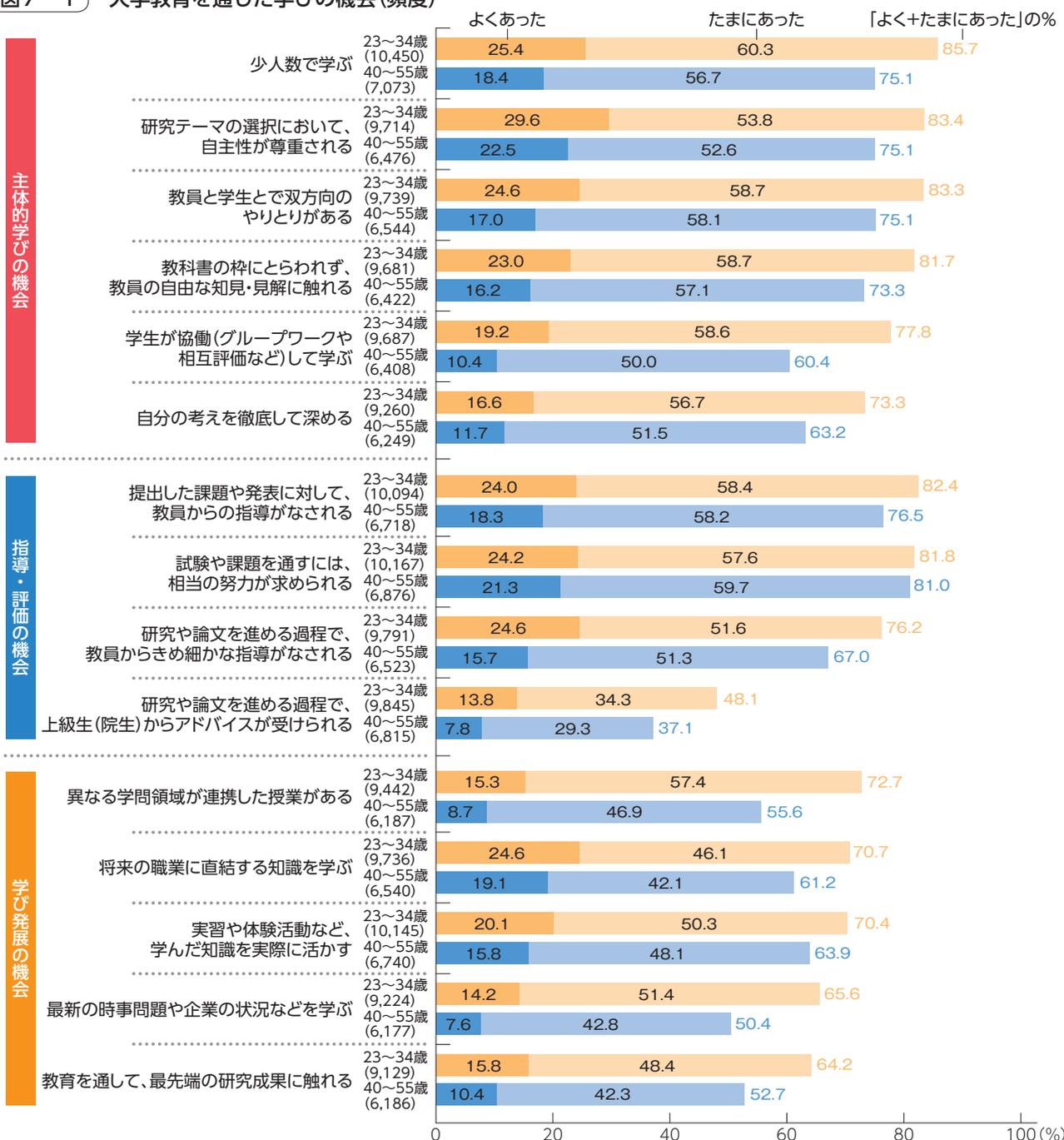
大学教育を通じた学びの機会が多様に。特に学生同士の協働学習や異分野学問と連携した授業が増加。

大学教育を通じた学びの機会の頻度を、「学びに主体的に参加する機会」を示す6項目、「指導・評価を受ける機会」を示す4項目、「学びを何かにつなぐ機会(実社会や異分野学問など)」を示す5項目でたずねた結果を、23～34歳と40～55歳の世代間比較でみた。いずれの項目も「よくあった」と回答した割合は増加しており、学びの機会が多様になっていることがわかる。「よく+たまにあった」の割合をみると、特に「学生が協働(グループワークや相互評価など)して学ぶ」が、17.4ポイント差(23～34歳 77.8%、40～55歳 60.4%)、「異なる学問領域が連携した授業がある」が、17.1ポイント差(23～34歳 72.7%、40～55歳 55.6%)と大きく増加した。



大学教育(授業、ゼミ、研究室、先生からの指導など)を通して、次のような機会はどれくらいありましたか。あてはまるものを、それぞれひとつお選びください。

図7-1 大学教育を通じた学びの機会(頻度)



※「覚えていない」と回答した者は、分析から除外する。

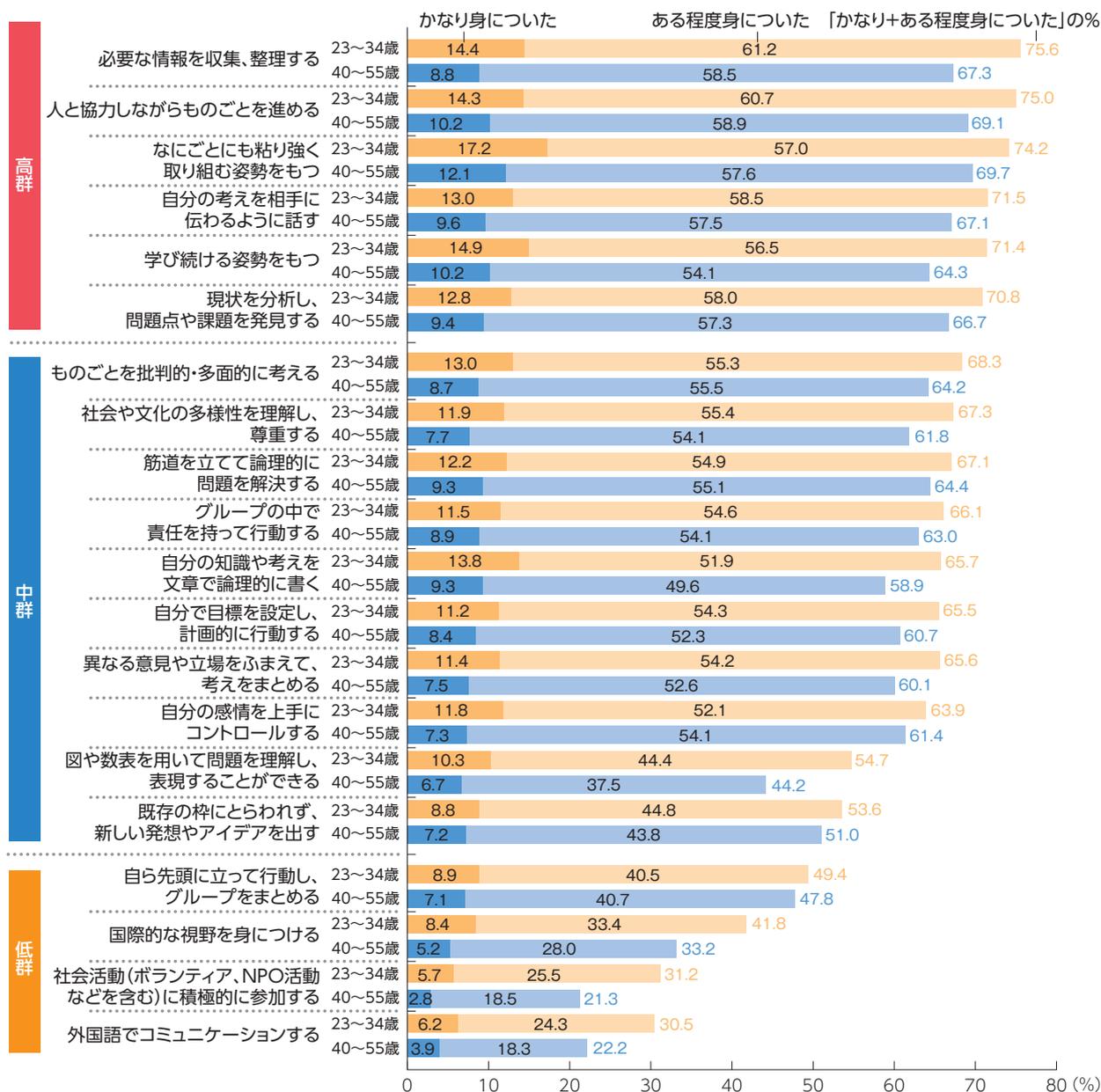
✓ 学習成果の自己評価は向上。情報処理能力と語学力は、特に伸びている。

大学時代の学習成果を、23～34歳と40～55歳の世代間比較でみると、いずれの項目も「かなり+ある程度身についた」と回答した割合が増加しており、学習成果の自己評価は向上している。特に向上がみられるのは、「必要な情報を収集、整理する」、「図や数表を用いて問題を理解し、表現することができる」といった情報処理を示す項目、「国際的な視野を身につける」、「外国語でコミュニケーションする」といった国際性を示す項目、「社会活動に積極的に参加する」である。

割合の高い項目からの並び順については、世代間に大きな差はない。大学で習得しやすいものと、しにくいものに変化がみられないといえる。23～34歳の回答を一定の特定範囲(高群70%以上、中群50～70%未満、低群50%未満)に分けて特徴をみると、学習成果として評価が高い順に、情報処理、協調性、粘り強さ、次いで、思考力、課題解決力、計画的行動力、表現力、最後に、リーダーシップ、語学力といった要素を示す項目が並んだ。

Q 大学生生活全体(大学時代のあらゆる活動)を通じて、次のようなことはどの程度身についたと思いますか。それぞれについて、あてはまるものをひとつお選びください。

図8-1 大学生生活全体から身についたこと





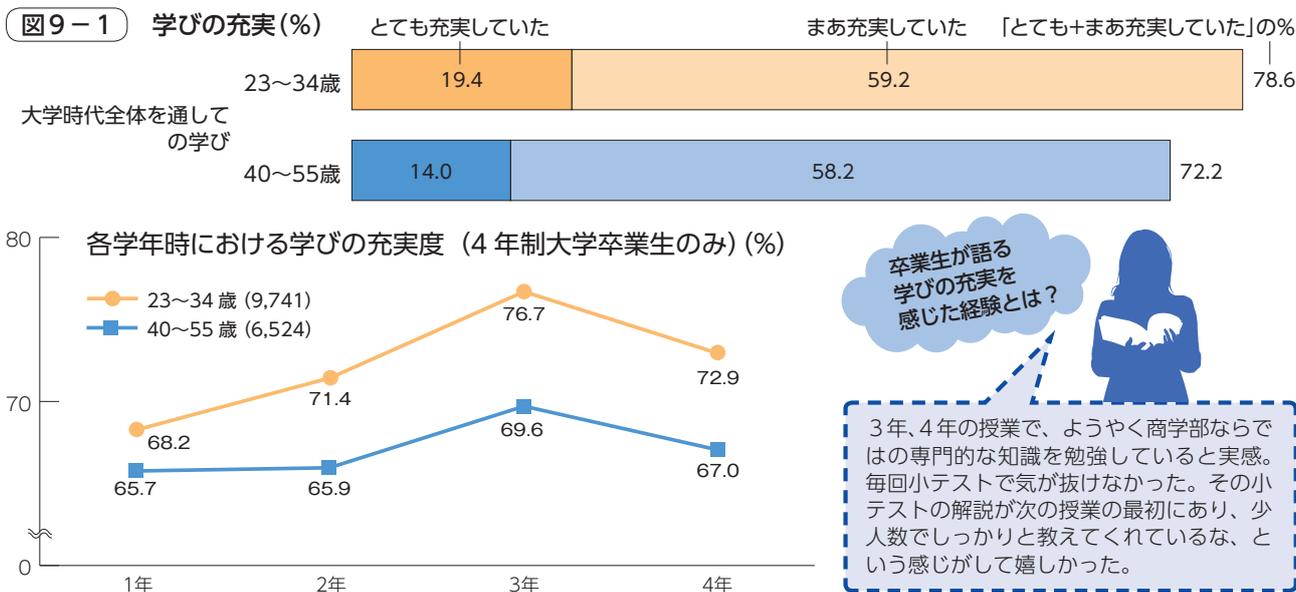
23～34歳の約8割、40～55歳の約7割が、大学時代に学びの充実感と成長実感があったと回答。

大学時代の学びの充実度を世代間比較でみると、「とても+まあ充実していた」と回答した比率は23～34歳で78.6%、40～55歳で72.2%となっている。同様に、成長実感についても、「とても+まあ実感した」と回答した割合は23～34歳で77.5%、40～55歳で72.5%となっており、いずれも増加の傾向にある。

また、4年制大学卒業者に限って、学年別に学びの充実度と成長実感を見たところ、いずれも大学1、2年時は低調に推移し、学びの充実度は3年時、成長実感は4年時にピークを迎えている。この傾向は世代間で差がなく、大学前半の過ごし方は世代を越えて変わらない課題であるようだ。



大学の各学年における学びを振り返り、充実度についてあてはまるものをひとつお選びください。

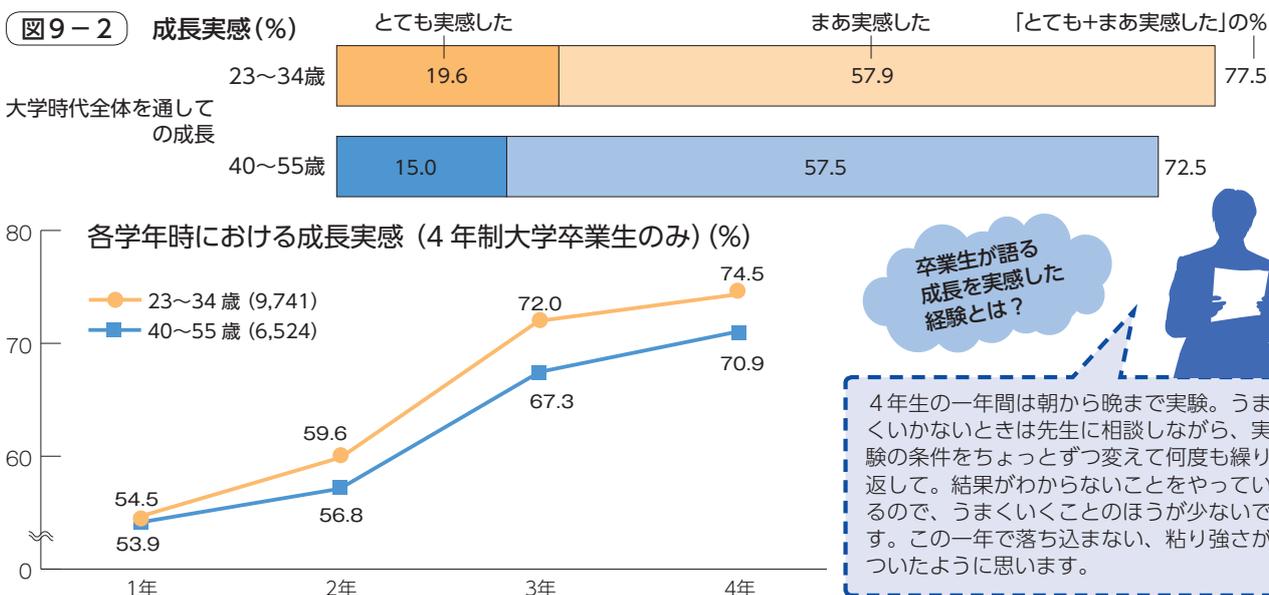


※「とても+まあ充実していた」の%。

※大学での学びと成長に関するヒアリング調査より。



大学の各学年における成長を振り返り、成長実感についてあてはまるものをひとつお選びください。



※「とても+まあ実感した」の%。

※大学での学びと成長に関するヒアリング調査より。



卒業後の年数が経つほど、大学教育に内容面の充実や能動的な学習態度を望む傾向。

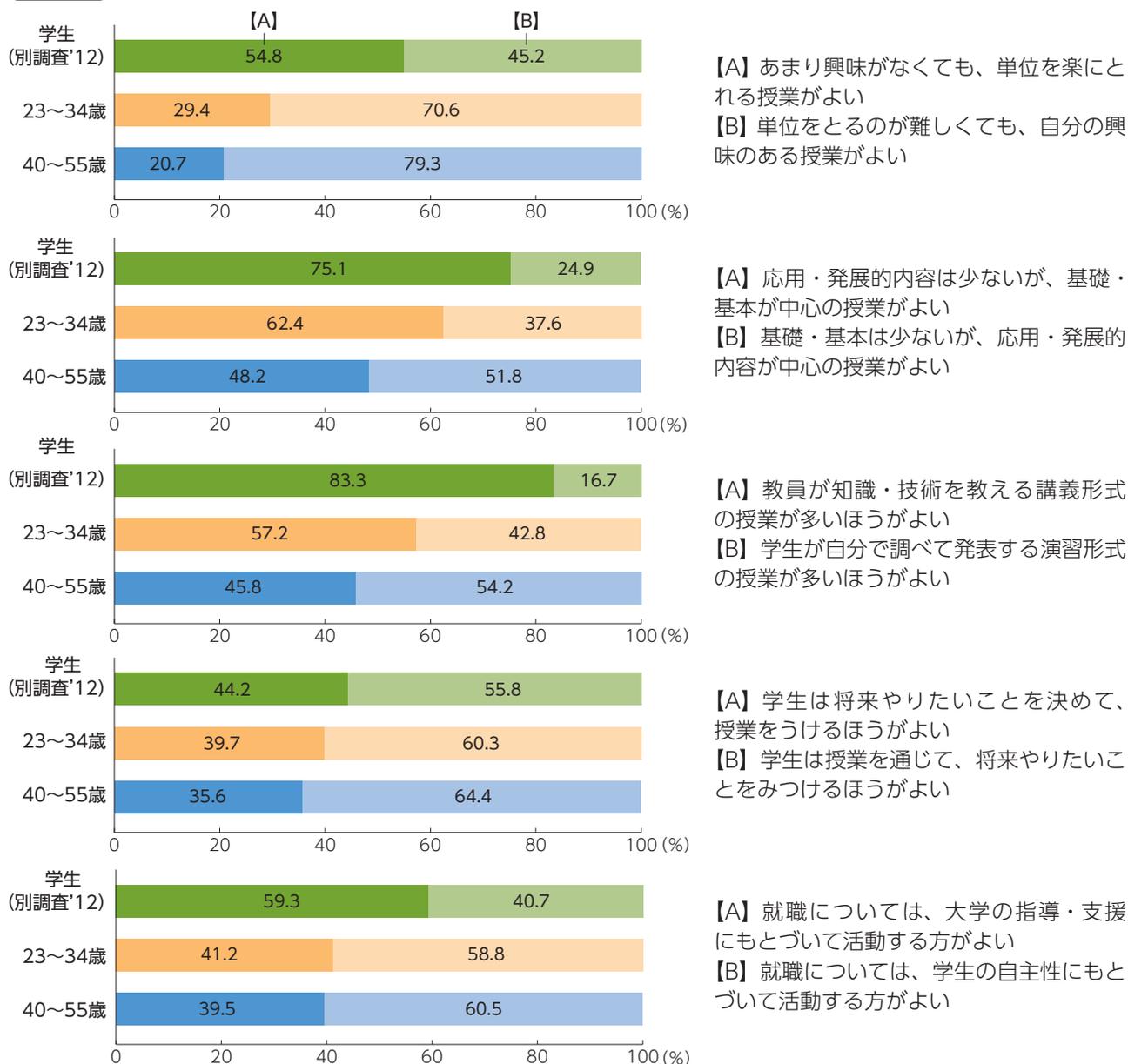
大学教育に対して、現在の自分の考えに近いほうを選んでもらった結果である。2012年に大学生4,911名を対象に行った「大学生の学習・生活実態調査」の結果と、本調査の世代間別の結果をあわせてみたい。

上3項目はいずれも、学生から23～34歳、40～55歳と年齢層が上昇するにつれ、【A】「あまり興味がなくても、単位を楽にとれる授業がよい」、「応用・発展的内容は少ないが、基礎・基本が中心の授業がよい」、「教員が知識・技術を教える講義形式の授業が多いほうがよい」を選択する割合が減少している。在学生ほど楽な単位取得や、受け身の授業姿勢を好むが、卒業後社会に出た視点からすると、より厳しい環境で学習すべきと判断した結果だろう。また下2項目も同様に年齢層が上昇するにつれ、【A】「学生は将来やりたいことを決めて、授業をうけるほうがよい」、「就職については、大学の指導・支援にもとづいて活動するほうがよい」を選択する割合が減少しており、若年層ほど大学教育と職業のつながりや就職支援を求めている。



大学教育について、現在のお考えに近いのはどちらですか。

図10-1 大学教育に対する考え



※全9項目のうち、特に世代間比較で差のみられた5項目を抜粋。

※学生の回答結果は、「大学生の学習・生活実態調査」(2012年 全国の大学1～4年生4,911名を対象にベネッセ教育総合研究所が実施)より引用。



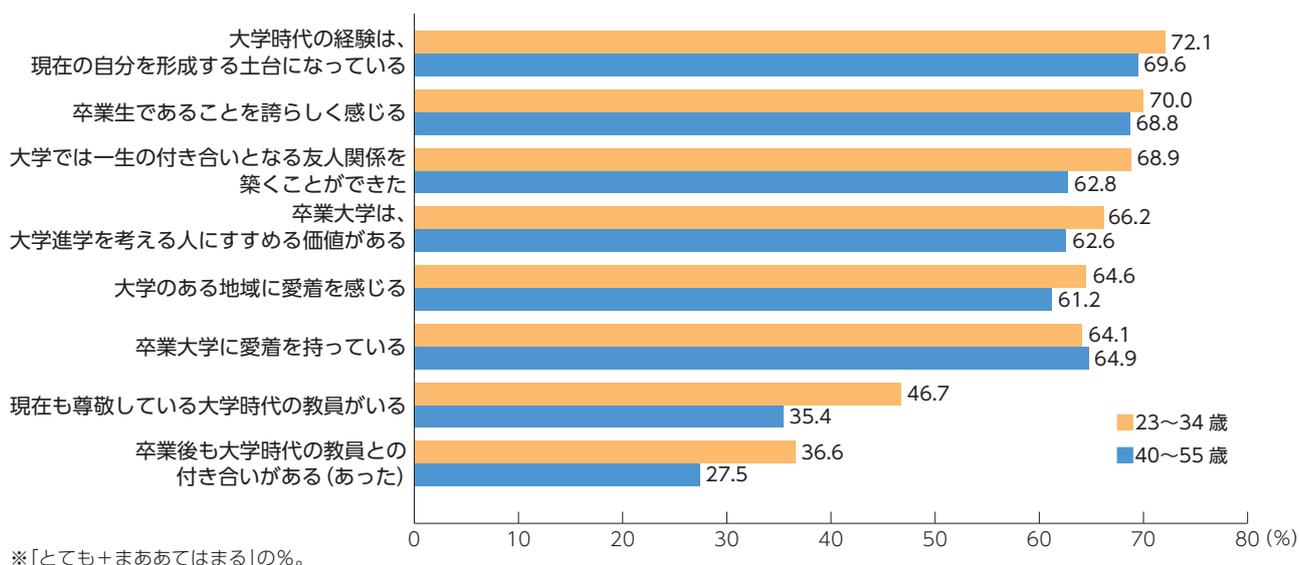
約7割が、大学時代を自分の土台となる経験だととらえ、卒業大学に誇りを感じるという。

卒業大学への思いを、23～34歳と40～55歳の世代間比較でみると、教員や友人といった人間関係を示す項目を除いては、大きな差はみられなかった。人間関係の差については、前述した教員・教職員との関わりの増加（P11 大学での学びの環境 参照）に加え、卒業後の年数の差が影響した結果であろう。「大学時代の経験は、現在の自分を形成する土台となっている」、「卒業生であることを誇らしく感じる」といった項目に「とても+まああてはまる」と回答した割合は約7割である。卒業生の約7割は、大学時代を現在の自分を形成する上でポジティブな経験であったととらえている。また「日本の50年後の未来は明るい」に「とても+まあそう思う」と回答した割合は、23～34歳で32.5%、40～55歳で27.4%にとどまるのに対し、「今の調子でやっていけば、これから起きることにも対応できる」に「とても+まあそう思う」と回答した割合は、23～34歳で65.2%、40～55歳で70.8%である。未来は必ずしも明るくないとしながらも、これから起きることに対応する自信がある者が、比較的多く存在することがわかった。



卒業した大学について、現在のお気持ちや状況にあてはまるものを、それぞれひとつお選びください。

図11-1 卒業大学に対する考え



現在のお考えにあてはまるものを、それぞれひとつお選びください。

図11-2 現在の考え

